

終助詞のない下降調が考えられる。これらに音声的な差があるかどうかについては今後の課題としたい。また、停滞調の音調をとる終助詞や間投助詞は、筆者の内省では思い至らなかったため、言及しなかった。

3-4. 各イントネーションの機能

次に、各イントネーションの機能について本資料の用例を中心にみていくが、本資料中に使用例のないものについては、他の用例(作例も含む)を適宜補う。

3-4-1. 平調

これは、上村(1989)の「基本音調」に対応するもので、話し手がある事柄を「普通の」態度、特に表情をつけずに表明する時の音調であり、*neutral*、*unmarked*であることを示す。日常の会話においてすべてこの調子で話せば、非常に無表情で、冷淡な印象を与えるだろう。しかし、ニュース原稿の朗読やドキュメント番組のナレーションでは、冷静かつ客観的な印象を与えるため、もっとも自然で普通の調子である。実際この音調は以下のように、ニュースや小説の地の文の朗読などに現れる。

女性アナウンサー：次は埼玉県の浦和、大宮与野の三市合併問題です。…
(テレビニュース。資料 B の *fnew01*、*fnew02*)

俳優：もう絶望の人晋吉だった。声がのどにひっかかりでもするように…
(小説の朗読 CD。資料 B の *maka01*、*maka02*)

女性アナウンサー：こんにちは。すこやかシルバー介護です。
(テレビの対談番組の司会。資料 B の *fkai01*、*fkai02*)

以上の例からもわかるように、「文」末、非文末に関わらず、句末を特別に変化させず、「普通」の態度で述べるときに現れる音調であり、語アクセントレベルでの音調がそのまま現れた状態と言える。宮地(1961)の「文の基本的音調」に当たる。したがって、本研究では終助詞がついた場合でも特に上昇、下降が認められないものは平調として扱った。

3-4-2. 上昇調

上昇調のもっとも代表的な機能は聞き手に対する何らかの反応の要求であり、それは主に文末に現れるものであろう。話し手の発話内容に対して直接言語的な回答を求めるものは疑問であり、行動による反応を求めるものが依頼や誘いの文型の文末に現れる上昇調であると考えられる。また、文末では驚きを表す上昇調もある。読み上げ音声による実験では疑問と驚きでは驚きのほうがやや最終拍末の F0 が平均的に高かったが、統計的に有意な差ではなかった(佐々木 2000b)。「驚き」といっても、例えば次の会話(筆者の作例)の下線部に見られるような場合は、ただ驚く、というよりは本当かどうか確認したい、問い返したいという気持ちも含まれていると考えられる。

A : いつ来るの? ↑

B : 明日。

A : え、明日! ↑

A : これ何の肉? ↑

B : 犬だよ。

A : え、犬! ↑

上記の例のような驚きについては、相手に対する何らかの反応要求と考えれば、同じ上昇調が使われることに不思議はない。同じ驚きでも一人で驚いて言った場合の「やだ犬!」とか「これなにっ!」が、上昇調になることはあまりない。ただし、「本当にそうだろうか」という自問のニュアンスがある場合はやはり上昇調になるだろう。概してこれら文末の上昇調については特に混乱は生じないだろうし、その機能についてこれ以上ここで多言を弄する必要はないだろう。

ここではむしろ非文末の疑問上昇、いわゆる「擬似疑問」について考えてみたい。これについては、最近よくマスメディアで取り上げられ様々な意見が出されている。近年よく耳にするようになったといわれるが、この種の音調が過去に全くなかったわけではない。音量が小さく音声分析はできなかったが、東京下町在住の老夫婦に対するインタビューの様子を録音した音声資料(注3)には、次のような例がある。

妻：そこの角のお寿司屋さん? ↑、(うん)都寿司の…

(夫及びインタビュアーに対して)

妻：おばあちゃん死んだのがー36年? ↑(うん) そう、じゃ、36年から…

(夫に対して)

このような例は、少なくともこのテープが録音された 1985 年にはすでにあつた。ただし、上の例からもわかるように、これは、話者の記憶内容について、そのことをある程度知っていると思われる聞き手に確認をとったり、自分の言った言葉を相手が知っているかどうか確認をとりつつ話しを進めたり、という本来の非文末の上昇調の機能を示す例だと考えられる。相づちを待つためポーズも長く、後者の例のように、「そう、じゃ、」と相づちに対して応答した後に話の本筋が続くようなケースもある。相手に自分の言っていることがあっているかどうかを尋ねるという意味で、文末の「疑問」と相通ずる機能だと言えるだろう。

これに対し最近の「擬似疑問」の多くは、斉藤(1999a, b)によれば、「聞き手の理解を確かめるモニター機能」を果たすことが多いようである。斉藤(1999b)によれば、「「お台場あ ↑ に行ってきたんだけど」と言うだけで「お台場って知ってるよね? あそこに行って来て…」と言うのと同じ効力がある。しかもその際、話し手は聞き手から最小限のフィードバックを得ながら、発話権を聞き手に譲ることなく話しつづけることができる。」という。他にも例を挙げてみよう。

「形状記憶繊維 ↑ で作ったシャツって、シワにならないんだって。」

(郡 1997, p.192 から借例)

A：玉ネギって体にいいんだってね。

B：うん、血がさらさらになる ↑ とかって言ってたね。

(筆者の作例)

これら是对話者がその言葉や事柄を知っているかどうかを確認しつつ、中断せずに話しつづけるという「聞き手の理解を確かめるモニター機能」の表れと言えるだろう。

このような用法に加えて、明らかに話し手にしか分からないはずの情報で、しかも聞き手が知っているかどうか確認する必要もない平易で一般的な言葉にも「擬似疑問」が付加される以下のような例も見られる。以下は資料 B の fdit41～fdit43, fdit62～fdit66 にあたるテレビの討論番組における女子高校生の発言である。

司会：どこ痩せたいの?↑

女子高校生：腕↑ とおなかが…

女子高校生：でもその子とかすごい食べてる↑ のにい△細くてえ△ でも自分
分はあ△ すごい抜いて↑ るのにい△ …

(司会者の「なんでそこまでしてダイエットをするのか」という問いに対して)

これらの例では、明らかに話し手自身にしか分からないはずの情報(上例では「腕」)や、相手
がその言葉を知っているかどうか確認する必要もない簡単な言葉についても擬似疑問が付与
されている。後者の例にいたっては2箇所現れ、そのうちの1箇所は普通ポーズが置かれるこ
とがない語句の途中にも現れている。最近特に問題視されるのはこのような用法だと考えられ
る。これほど極端な例ではないが、このような確認する必要のない部分での上昇調の使用は現
在では高校生や女性に以外にも使用者が広がっているようである。

30代男性：必死でしたねえ。△ 早く保育園を↑ その辰巳の> 今の保
育園に 入れるように…

(保育園に関するテレビ番組でインタビューに答える首都圏在住の地方公務員の男性)

30代女性：朝も夜も預けられない。 朝は早すぎるし、夜は お迎えが遅
すぎるしで↑ で 最初に考えたのはあ△…

(同上番組でインタビューに答える男性の妻の地方公務員)

このような例は、英語における平叙文の上昇調(Ainsworth 1994, Allan 1990, Britain 1998, Britain & Newman 1992, Marvin 1982)とも共通する「聞き手志向」の現れではないかと考えられる。メンタルスペース理論に基づいた斉藤(1999b)の分析によれば、「擬似疑問」がオープンクエスチョンに対する答により多く現れることから、単にそれだけでは説明できないとしながらも、聞き手の心的「データベース」における当該語句の活性化機能をもつのではないかとの説が出されている。しかし、誰にとっても理解が容易な語句についても頻繁に上昇調が付加される、最近の自然談話に現れる「擬似疑問」の多くは、斉藤の言う「活性化」だけでは説明ができない。このような用法については、むしろ斉藤(1999a)も指摘しているように、談話上のストラテジー

としてのある種のポライトネス(Brown & Levinson 1987)表示機能を担っていると考えた方がいいだろう。さらに、本資料中の女子高校生のようにかなりの頻度でこの擬似疑問を連発すると、以下に述べる「強調」や「昇降調」と同様にある種の言葉調子、「話調」が形成される。このような言葉調子、口調は一部には「自信のなさの現れ」や「甘え」と見るむきもあるが、上昇調のもつ「聞き手志向性」は、話者にとってはある種の「待遇表現」としての働きと共通する感覚を与えているため、文体表示マーカの一つとしての機能を果たしているとも考えられる。この点に関しても今後の実証的な社会言語学的調査が待たれる。第1章でも述べたが、その際特に「ディスコース・ポライトネス」(宇佐美 1997)の視座は非常に有効かつ重要だと考えられる。

3-4-3. 強調

強調は上村(1989)の「つよめ音調」にほぼ対応すると考えられる。強調が文末に現れる場合、たとえば「わかった>」や「こっちじゃなくてあっち>」などでは話者のきっぱりと言明したい気持ち、あるいは断固とした態度を表すと言えるだろう。また子供が大勢で、学校での別れの挨拶を声をそろえて「さよーならっ>」と言うような場合には、調子を合わせるという機能もあると考えられる。また小学校の教室などで聞かれる「いいで(一)>す。」「違いま(一)>す。」「わかりませ(一)>ん。」などは、無声化した「す」や撥音が強調しにくいいため、強調箇所が前に移ったもので、音節単位で考えれば同種のもものと認められるだろう。さらに子供などがふざけて「あー、見いちゃったあー」、「や だ よー」、「××ちゃん、悪いんだー」、「いいんだもーん」などと言う場合、句末拍(音節)が、より長くピッチの高い状態を維持して発話される場合もあるが、機能的には強調と同じものだと考えられる。

これを上昇調ではなく強調の一種と考える理由は「みいちゃったー!」は「みいちゃった!>」に置き換え可能だが、「みいちゃった(あ)↑?」や「みいちゃったー↑?」では疑問や反問の意味になってしまうからだ。

さて、このような強調のイントネーションは文末以外の文中の区切れにも現れる。

先生：今から>、先生は>、大事な>、お話を>、するので>…

(筆者作例)

このような例は、大人が大勢の子供に何か指示を与えたり、説明したりする際に現れる。いわゆる「先生口調」、「村岡花子調」などと呼ばれるものである(注4)。このように句末(文節末)を

高くすることで、終わらないこと、非完結性を示し、文が続くことを聞き手に知らせ注意を惹きつける効果があると考えられる。また上村(1989)は「はなし相手に、もしくははなし手自身に、話の内容をつよく念をおし確認させながらはなすという感じを伴う」と説明している。小学校の低学年児童の中には、朗読する(させられた)際にこのような調子で話す者がいるが、上村のいうように、「はなし手自身」の理解を助けるためだと考えられる。資料 B の mnez01～mnez14 は、町のねずみが田舎のねずみからの手紙を朗読するくだりだが、ここにもこの調子が使われている。

町のねずみ：拝啓 その後> お元気でしょうか> 長い冬も終わって
あたりはすっかり 春になりましたね> 町ではさぞかし>
にぎやかなことでしょう。でも、 僕のいる> 田舎も
なかなかいいもんですよ。> お忙しいこととは 思います
が>…

これは、上記のように文節末を頻繁に強調することで、「子供が(たどたどしく)朗読している様子」が効果的に表現された例だと考えられる。このように区切りを多くすることで、結果的には聞き手は話の内容を整理し理解する時間が多くとれるようになる。ポーズがない発話は聞き手が内容を十分理解することができないという実験結果(杉藤 1989, 1994, 1997)から、特に子供の場合、強調を多用することでポーズを十分取ることができれば理解の助けにもなると考えられる。このような事情で「先生口調」や子供が朗読する際の調子として強調を多用するこのような言葉調子が採用されたのではないかと考えられる。ただ、聞き手の理解を助けようという「親切心」はある意味での「他者志向」であり、「待遇表現的効果」を派生すると考えるのはそれほど無理な推測ではないだろう。筆者は 1991 年頃化粧品売場の若い女性店員が客(筆者)に化粧品の説明をするとき、頻度はそれほど多くないがこのような調子で話しているのを聞いたことがある。「丁寧さ」を表現したい場合もこの調子が使われるのではないかと考えられる。さらにこの背景には、非文末の句末強調と非常によく似た機能を持つ間投助詞「ね、さ、よ」やいわゆる「尻上がり」イントネーション(昇降調)がフォーマルな場面での使用を制限され、これを避けたいという心理が働いたため、その代替形式として強調を使用したという事情があるとも考えることができるだろう。

ただし、この非文末の強調がいつでも言葉調子、「話調」を形成するほど多用されるというわけではない。このような場合は構文上の大きな区切りに現れることが多いようである。以下は

比較的フォーマルな談話、資料 B の fish12～fish17、fish22～fish26 のテレビの育児相談番組に見られた例である。

40 代女性：初めて赤ちゃんを抱っこするお母さんにとっては本当に 首もぐらぐら
 ですしもう壊れそうで 恐いって感じがあると思いますけれども>
 毎日→ お世話していく間に> あのどンドン慣れて…

40 代女性：ですから ま しばらく抱いてトントンして> ホントにで
 あの→ でないようでしたらばそうっと寝かしてもらって
 もかまいません。

また、強調というと一般にはいわゆる「プロミネンス」という言葉が想起される。ここでは第 1 章でも述べたようにプロミネンスもイントネーション現象の一つと考える。川上(1957)は東京語のプロミネンスを「その部分が特にはっきりと間違いなく聞きとられることを目的とする発音法の型」であるとし、プロミネンスが声の上昇によって表示され、1 拍目にアクセント核がない場合は 1 拍目から 2 拍目にかけて上昇が起こり、1 拍目にアクセント核がある場合は、直前の拍から該当する部分の 1 拍目にかけて起こると指摘した。また単語の一部にもプロミネンスは適用されると述べている。そしてこのような例について大石(1959)は、「シャ‘シ’ン‘キ’ガ道楽」などの例を挙げ、本来のアクセント型を壊すプロミネンス(あと高型)だと指摘した。そして、「セ‘ンメ’ン‘キ’!」などように文末に用いられるときは「イントネーションの一つの注目すべき型としても捉えられる。」と述べている。このような語句自体の強調の例は本資料では資料 B の fkai19 の 1 例のみ見られた。

司会者：夢> というのは大事なんですねえ。^

ただし、このような語句を強調したり、語句の中の一部を強調したりする場合は、必ずしも句末やポーズ直前に現れるとは限らない。ここではポーズ前のイントネーションのみ扱ったため、本資料中に実際にはなかったが、もし以下のような例(筆者の作例および、実例)があれば、対象から外れることになる。

A：ヤマザキくん、ちょっと…

B: ヤマザ>キじゃなくてヤマサ>キです。

A: 失礼、ヤマサ>キ君、これ…

子(3歳): これ アタマ。(まだサ行を発音できなかった頃、長野新幹線を見て)

筆者: アタ>マじゃなくて あさ>までしょ。

3-4-4. 下降調

下降調は、上村(1989)の文末の「くだり音調」にほぼ対応するものだと考えられる。上村(1989)によれば、文末の「くだり音調」は幾分長めの最終音声中での急速なピッチの下降とそれに伴う強さ(intensity)の減少を特徴とし、話し相手の言明、態度、行動などに対する驚きの気持ちやあきれた感情などを伝えるものとしている。

母: 何描いてるの?↑

子供: 電車だよ。

母: へえ、電車(ア)↓、すごい電車だねえ。Λ

上記は筆者の作例だが、このような何かに感嘆するような文脈で現れるものと考えられる。また、最終拍が長音化するとともに、その前の句に高いピーク(上例では「デ」から「ン」へかけての句頭の急上昇)があることは杉浦(1997)の指摘する通りである。ただし、驚きあきれた感情以外にも、落胆や同情の気持ちを表す次のような例(いずれも筆者の作例)では、先行部分にそれほど高いピークは現れないようである。

A: Cさん、不合格だったみたい。

B: そう(↓)、まただめだったのオ↓、 あんなに頑張ってたのに…

A: そのアパートの火事すごかったらしいね。

B: うん、一人亡くなったらしいよ、一人暮らしのおじいさんが。

A: そう、亡くなったのオ↓…

また下降調の音調をとるものとして、杉浦(1997)は、「話し手が眼前の事態から推論して、今

初めて気がついた事実を述べている」ときに現れる「受け入れのイントネーション」として以下のような例を挙げている。(いずれも杉浦(1997)より引用。)

「あ、このボタンを押せばお湯が出るのか(ア)↓」

(入ってきた相手が新しいコートを着ているのを見て)

「あ、コート買ったんだア↓」

などである。杉浦によれば後者の例のように、下降イントネーションが疑問の終助詞「か」や「の」ではなく、「なんだ」という断定の文型に付与されるのは新しい現象だという。

本研究の談話資料では自然談話から下降調を得ることができなかつたため、その音声的バリエーションや終助詞の有無による音調の違いなども十分明らかにすることができなかつた。実際の用例をさらに集めて検証しなければならない。

3-4-5. 昇降調

昇降調が文末に現れる場合は終助詞の「なあ」、「ねえ」や、郡(1997)が指摘するように、「はやくう!」などと促すとき見られる。前者については「もう春だなあ。」、「すっかり秋ねえ。」のような独り言や、独り言でなくても聞き手に共感の得られそうな話者の驚きを伴うような感想を述べるときに多く使われるようである。「ねえ」の場合は「ね」の性質上、相手に共感を求め、または共感を示すというニュアンスもある。

A: 傘持って来た?↑

B: ううん、Aさんは?↑

A: 持ってこなかった。

B: どうしよう。困ったねえ。∧

A: うん。

(筆者の作例)

ひどいやつがいたもんだねえ。∧

(小説の朗読、資料Bの fshi14)

後者については、「促す」だけでなく、「ちょっと待ってたらあ!」や「危ないって言ってるのに!」、など、やや非難めいた口調で発せられることもある。(ただし句末部の上昇が少なく、上昇部分が前寄りになると下降調に聞こえるものと考えられる。)

さらに最近では、ここであげた以外にも昇降調が終助詞「か」や「よ」に付く場合が見られるようになった。ただしこれらは、機能的には明らかに非文末の昇降調の特徴を備えており、上記の終助詞の「なあ」、「ねえ」、さらに「いやだよお」の「よお」とは異なっている。この場合の終助詞「か」や「よ」は、次の例からわかるように「完全な」文末とは言いにくい箇所に現れる点からも、その他の終助詞の機能と一線を画し、より間投助詞的な機能を持っていると考えられる。

10代男性：普通サラリーマンの人と違って、よく酒とか飲みに行くじゃない
ですかあ、 仕事が終わった後とかにいへ…

10代男性：家族四人で食べた事ないんですよおへ いつも僕一人で食べて
てえへ…

(いずれも同じテレビの討論番組での10代男性の発言。後者は資料Bの
mkom33、mkom34)

10代女性：すぐそこに福祉センターっていうのがあるんですよおへ でそこに
バスが来るんでえへ…

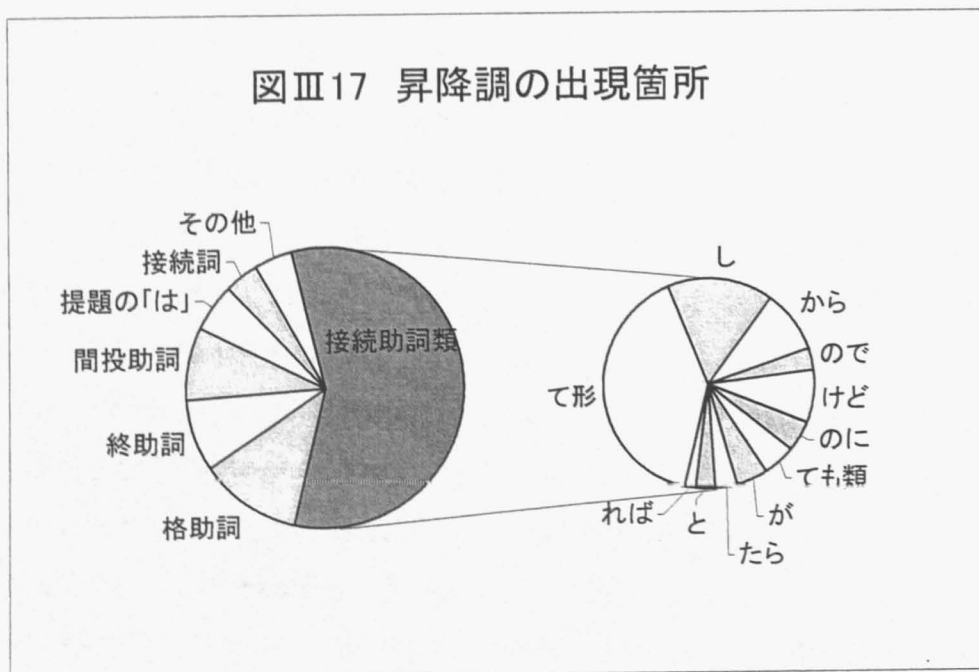
(筆者の質問に答えるアルバイトの女性)

上記の例も含めて、文末以外の箇所で現れる昇降調は、間投助詞の「ねえ、さあ、よお」のように、構文上の大きな切れ目を表示することで非完結性を示し、話順を保持するとともに、ある頻度をもって使われることでリズム、あるいは調子を整えるといった機能を持つと言える。非文末の強調が繰り返し現れることで「先生口調」などと呼ばれるような「話調」を形成するように、このイントネーションもある種の「話調」を形成すると考えられる。第2章で見た通り、1980年代には、いわゆる「尻上がり」イントネーションの頻出する「話調」は「ブリッコ口調」、「女子大生口調」などとも言われ「甘えた感じのする」、「耳障りな」言葉調子として非難されたことから、当該イントネーションの頻出する「話調」は容易に想起することができるだろう。3-3-3でも述べたが、現在では討論や解説番組などで年齢や性別を問わず、F0の高低差がそれほど大きくない形が広く使われている。しかし、「擬似疑問」や強調と違って、語句の途中に現れるこ

とはなく、しかも、短い文だけで成り立つ発話では現れにくいという特徴が見られる。本資料中では、朗読以外の談話に非文末の昇降調が見られるが、それらについて出現箇所をまとめると表Ⅲ19、図Ⅲ17のようになる。ここには、ポーズ前以外の昇降調も含まれている。これらからわかるように、特に長い文の区切れ目になりやすい接続詞や接続助詞、用言の連用形(特に「て形」)に多く見られる。昇降調を含む発話文は本資料中に20例あったが、そのうち10文節以下の文は6例しかなく、比較的長い文に多く現れる傾向は明らかである。ただし、昇降調の出現頻度は話者により差が大きく、10文節に1回程度から、3、4文節ごとに出現するものもある。以下に資料Bから50代男性(mish28~mish39)と10代男性(mkom44~mkom52)の発話の例を挙げる。

表Ⅲ19 昇降調の出現箇所

接続助詞	62	……………	用言の接続形の内訳	
格助詞	13		て形	25
終助詞	9		し	10
間投助詞	9		から	6
提題の「は」	6		ので	2
接続詞	4		けど	5
その他	5		のに	3
合計	108		ても類	3
			が	3
			たら	2
			と	2
			れば	1



50代男性：いえ あのーロックコンサート別に行って悪いもんじゃないと
 思いますのでえん え、それ自体はあの一問題ないんですがあん
 えっとー→ まあ夜遅くまでですねえん あの夢中になってい
 て一寝不足になったりとか まあ、それからー→大変混雑します
 のでねえん 人ともみ合っつて おなかになんか衝撃を受けるとか
 ま、そういうようなことないように やはり気をつけていただけ
 れば コンサート自体は問題ないと思います。

(育児番組で質問に答える医師)

男子高校生：やっぱりいん 僕の知ってる家でえん 仕事が忙しいのにいん
 父親があん 仕事ー→一回 きり きり止めて夕は、食んとき
 だけえん 帰つて来てまた仕事に行く家とかあるしいん そういう
 ふうになんか努力してえん 家族団欒をつくれればいけどおん…

(前出のテレビの討論番組での発言)

本資料では全般的に若い世代のほうがより高い頻度で非文末の昇降調を使う一方で、間投助詞「ね」などの使用が年配層ほどは見られないという傾向が見られた。また原(1995)でも、あまり改まりの程度が高くない場面では、若年層(女性)でいわゆる「尻上がり」イントネーション(昇降調)の使用頻度が高く、老年層(女性)で間投助詞「ね(え)」の使用頻度が高い傾向があることが確認されている。しかし、このような昇降調と間投助詞の出現頻度の差に話者の年齢や性別などの社会的属性がどの程度影響しているかについては、さらに綿密な実証的調査が必要だと考えられる。

また、この非文末の昇降調の後には聞き手による相づち(うなずきなども含めて)が入ることが多く、相づちの「うん」や「ああ」などは、話し手が伸ばした句末部分にちょうど重なるように挿入されている。相づちについては次章(4-3)で再び触れるが、おそらく、聞いているだけの聞き手も、話し手の話しに「参加」させることにより、話し手は聞き手を自分の話しに引き込むことができるだけでなく、聞き手に一方的に情報を受けただけというある意味での不均衡さを感じさせないという談話上の機能もあるのではないかと考えられる。

水谷(1983, 1993)は、日本語の話し合いなどの会話に多く見られる「互いに相手の話しを完結し合う」タイプの話の進め方を「共話」という言葉で表している。また、黒崎(1995)はこの「共話」の成り立つ条件を「すべてを言い尽くさず相手に発話完結の機会を与えようとする話し手側の

気配りと、積極的に共感の情を表そうとする聞き手側の気配り」としている。本資料の例は、フォーマルな場面で自分の意見を発言する談話であり、発言者は一方的に発言することが、当然認められる場面である。それにもかかわらず、聞き手にも何らかの形で参加するよう働きかけているかのように、この昇降調を多用する背景には、水谷(1983、1993)や黒崎(1995)の指摘するような談話構成に関わる日本的習慣による影響があることも否定できないだろう。

3-4-6. 停滞調

停滞調の機能は、「ええと」、「あの」などのフィラー(4-3 で言及)と同様、次に言うべき言葉を考える時間を稼ぐことだと言えるだろう。このイントネーションを使うことで、話者の話順は原則として確保されるため、発言権を保持しつつ考えをまとめることができる。非文末の昇降調(いわゆる「尻上がり」)や非文末の上昇調(「擬似疑問」)との最大の相違は、聞き手による相づちがほとんどないことである。文末以外では、強調や昇降調や上昇調が話の節目ごとに現れ、聞き手の注目を半ば意図的に集めようとするのに対し、この停滞調での時間稼ぎには、聞き手に対する働きかけの意図は見られない。むしろ聞き手は話し手が次の言葉を見つけて話しを進めるのを黙って待つことが求められているかのようである。

定延・田窪(1995)は、「ええと」や「あの(一)」などのフィラーを「心的操作標識」とし、話し手の心的操作表示にその本質的機能があるという。そして「話し手はこれらを用いて自分のおこなっている心的操作をモニターすることにより、当該の心的操作を支援でき、聞き手にとっては次発話予測の手がかりとなり得るので、円滑な談話進行を可能にし、聞き手からの支援(助け舟)を話し手が得られることにつながる」としている。しかし、本資料で見える限り積極的な「聞き手からの支援(助け舟)」は相づち同様見られなかった。話し手の心的操作モニター行動を阻害しないような配慮が聞き手の側に働いているようである。ただし、モニター行動を阻害しないと自体が支援と考えれば、定延・田窪(1995)の説は納得がいく。対話者間の社会的関係によって、「助け舟」を出すタイミングや、「助け舟」を出すことの是非についての判断が異なることも考えられるが、さらに詳しく調べる必要があるだろう。

また、実際、停滞調の出現箇所は表Ⅲ20 に示す通り、フィラーに現れることが多く、ポーズ直前にも見られるが、むしろポーズによる句切れのない部分のほうに多く見られる。次に言うべき言葉を思い出せないときや忘れてしまった時など、語句の途中で停滞調が現れることもある。また、伸ばすのではなく短い「あの」や「その」を挿し挟む場合や促音が伸びて無音の状態が続くような場合もある(図Ⅲ18-1、2 参照)。「言い淀み」から立ち直るための時間を稼ぐにしろ、

次に言うべき言葉を捜すにしろ、発話を継続するための努力を(頭の中で)していることを聞き手に示す機能、「心的操作表示」機能という意味では停滞調も同様であろう。以下に資料Bからいくつか例を挙げる。

司会者：で、そ、 そういうときにその ちょっとした言葉 がそのままの
い、自分の しゃべ い、意図したと あのその内容がしっかりと
う、あの一→ つたわる…

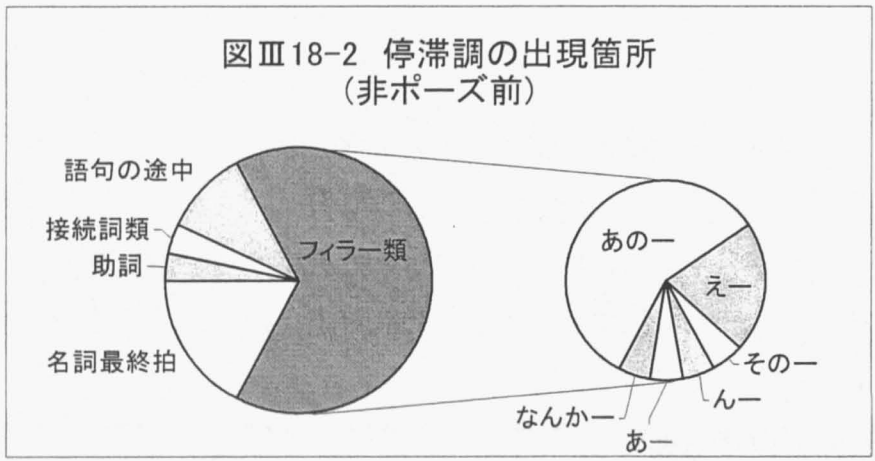
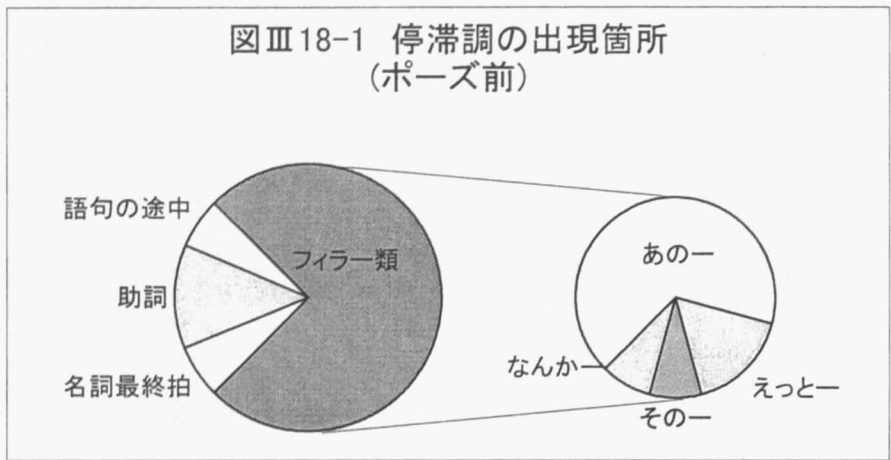
(介護に関するテレビ番組の女性司会者の発言、fkai39～fkai48)

男子高校生：やっぱ父があん仕事で忙しくてえん ほとんど家に 帰っ→
てこないからあん だから…

(テレビの討論番組での発言、mkom40～mkom43)

50代男性：妊娠の一→非常に早い時期はですねえん まだあの一→胎児が一→
元気に育ってるかどうかわかりませんので…

ポーズ前停滞調		ポーズ前以外の停滞調とフィラー	
名詞最終拍伸長	1	名詞最終拍伸長	5
助詞伸長	2	助詞伸長	1
接続詞,接続助詞伸長	0	接続詞,接続助詞伸長	1
語句の途中拍伸長	1	語句の途中拍伸長	3
伸長したフィラー(「あの一」など)	12	伸長したフィラー(「あの一」など)	19
フィラー(短いだけ)	0	フィラー(短いだけ)	9
まあ、ま	0	まあ、ま	5
合計	16	合計	43
		内訳	
		あの一	8
		えっと一	2
		その一	1
		なんか一	1
		内訳	
		あの一	11
		え一	4
		その一	1
		ん一	1
		あ一	1
		なんか一	1



50代男性：飛行機はですねあのー→ えっとー→ま、三時間ぐらいのフライトでえへえーと妊娠中に特に悪い影響はなかったというこれはきちっとした論文出ているんですがあへ あのー→ただえっとー→ 出産が近ー→づいた時期ですね↑ この時期はあのー→飛行機会社の方があへ…

(上二者はテレビの育児番組で質問に答える医師。mish14～mish16、同 42～47)

この停滞調やフィラーは、話し手により頻度やタイプが異なっている。談話のタイプや話者の社会的属性との関連についての詳細な実証的検証が待たれるが、この問題については第4章で再び詳しく言及する。

3-5. 談話のタイプと各イントネーション型の分布

ここでは本章で得たイントネーション6タイプを利用して、談話場面別に、これら6種の句末